

大学教育の改善をめざした実践的・体系的FD活動の方向

森 和夫

(徳島大学 大学開放実践センター)

要約: FDが真に大学教育の改善を実現するには場当たりの、状況対応的な活動では目的の達成は困難だろう。本研究はこれまでに指摘されているFDに関する記述と調査結果を手がかりに実践的・体系的FD活動の方向について論じようとした。実践的・体系的FD活動が実現できれば、段階的なFDの取り組みの提供、プログラムの相乗効果、教員の教育に関する力量の向上のプロセスの明確化、FD活動の内容・方法の全体像の提示、大学の教育力の評価の可能性、計画的FDの展開において貢献できる。研究方法は次の2つの方法によって行った。1つは大学評価・学位授与機構のFDに関わる内容、大学審議会答申の内容項目を分類した。2つは学生を対象としたワークショップおよび調査結果である。主に学生が求める教育の内容・方法に関する内容で構成した。その結果から、大学教育の改善をめざすための体系的FDモデルを提起した。

(キーワード: 大学教育、体系的・実践的、FD活動)

The direction of the practical and systematic FD activity which aims at the improvement of university education

Kazuo MORI

Center for University Extension, the University of Tokushima

An improvement of university education will be difficult by FD activity only to correspond to a situation. Examining the description and results of an investigation about FD, we discussed the direction of the practical and systematic FD activity. The following effects are expected if the practical and systematic FD activity is realizable.

- (1) Offer of Gradual Involvement in FD
- (2) Synergistic Effect of the FD Program
- (3) Clarification of the process of the improvement in the ability for a teacher's education
- (4) Presentation of the whole image of the contents and methods of FD activity
- (5) Possibility of Evaluation of Educational Ability of University
- (6) Planned Enforcement of FD

The research was performed by the following 3 methods. The 1st one is the classification of the University Evaluation Organization's FD contents and the contents of the council's reply. The 2nd one is the examination of the workshop for students, and results of its questionnaire. These are about what students expect about their education. As the result of this research, the systematic FD model for improving university education was proposed.

(key word: university education, systematic/practical, FD activity)

1.問題の設定

FD活動の取り組みの重要さが指摘されてから、多くの時間が流れた。平成10年10月の大学審議会答申がきっかけとなって、大学の教育力を高める方策が打ち出された。これ以前からも平成4年ころから断片的ではあるが、大学教員の教育力が大学審議会を中心に問題とされていた。われわれ

はFD(Faculty Development)を教員、教員集団、学部の開発、能力開発ととらえ、狭義の定義を「ひとりひとりの教員の教育力の向上を図ること」と設定し、広義の定義を「大学の教育理念を実現するためのあらゆる活動を対象に向上・改善を図ること」とした。

一般にFD活動というと講演を中心にした内容

で足りるとする風潮があり、これで教員の教育力の向上に反映できるとはとても考えにくい。教員の教育力は実際の授業を効果的にどう展開するかについて、教員ひとりひとりが取り組んで成果の出るものであろう。

従来のFD活動の大半の取り組みは講演会を開催したり、シンポジウムなどで意見交換したりという、啓蒙型の活動が中心であったように思う。最近では公開授業や授業研究会が行われるようになってきている。また、合宿型のワークショップも行われるようになった。しかし、これらはFDの個々の状況に対する対応として行っているに過ぎず、段階的計画的実施として展開している大学は極めて少ない。

大学教員の教育力の向上は、高等教育機関の未来戦略に欠かすことが出来ない。しかし、単に大学評価の問題ではなく、学生ひとりひとりの学習成果や教員のやりがい、生きがいにかかわる大事な事柄と考えたい。大学の使命、大学教員の使命とかかわるといことができる。

われわれはこのような関心をもって「大学教員の職業生涯の構築」の視点からFD活動を捉えなおし、その再構築について検討した⁽¹⁾。この結果、大学理念を反映させた大学教員の活動の範囲とその能力開発の段階的実施のプランを明らかにした。しかし、FDの体系化にまでは踏み込んで論述してはいなかった。

本研究はFDで具体的に何をどのように実施するか、それによってどのような成果が期待できるか、具体的なプランは何かについて検討を進めることにしたい。これらの検討を通じて大学教育の改善をめざした実践的・体系的FD活動の方向について論じることにはしたい。また、現在行っている徳島大学の体系的・実践的FDの取り組みの位置づけを明らかにしようとした。

2.研究方法

本研究では次の2つの方法によって行った。1つは大学評価・学位授与機構の平成12年度実施の評価報告書「教養教育」(平成15年10月)に記載されたFDに関わる内容をFDの内容・方法に限定して収集し、分類した。また、大学審議会答申

の中で扱われている内容項目も同様にして分類した。2つは学生のワークショップ成果と、調査結果である。ワークショップは2003年1月に実施した徳島大学薬学部学生FDワークショップによっている。調査は学生が求める「良い授業、悪い授業」の質問紙調査である。実施は徳島大学2002年度教育方法学受講生(総合科学部3年生、4年生)67名の結果と2003年度の96名の結果である。ここでは2003年度のデータを使用した。

3.FD内容項目の検討

3-1.大学審議会答申に見る内容項目

大学審議会「高等教育の一層の改善について(答申)大学審議会 平成9年12月18日」には以下の記述がある⁽²⁾。

「5.教育内容・方法の改善のための組織的取組が必要である。学生による授業評価の導入、新任教員のオリエンテーションの実施などのほか、教授法に関するマニュアルの作成、教科書など教材の開発なども有効である。従来、教育の内容・方法の改善は、多くの場合、個々人の努力によるものであり、その成果も個々の教員の情報にとどまっていた。今後は、個々の教員レベルだけでなく、全学的に、あるいは学部・学科全体で、非常勤講師の参加も得て、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修(ファカルティ・ディベロップメント)を推進することが必要である。」

これらから内容項目を整理すると次の5点になる。

- 学生による授業評価の導入
- 新任教員のオリエンテーションの実施
- 教授法に関するマニュアルの作成
- 教科書など教材の開発
- 大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修

同様にして大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学(答申)平成10年10月26日」では「教員自身が教育者としての責任をこれまで以上に自覚し、自己の教授能力の向上のために不断の努力を重ね、学生の学習意欲を喚起するような授業

を展開していくことが必要である。」

「b.・大学がこれらの多様な要請等にこたえ、より質の高い教育を提供していくためには、個々の教員の努力はもとより、大学あるいは学部・学科としての教育目標を明確に示し、その目標実現のための授業科目の開設及びカリキュラムの編成を行い、各教員はその趣旨に沿った授業内容・方法を決定するという一連の取組が必要である」と述べている⁽³⁾。

同様にリストすると次の5点が挙げられる。

教授能力の向上

学生の学習意欲を喚起する授業展開

学部・学科としての教育目標の明確化

目標実現のための授業科目の開設及びカリキュラムの編成

趣旨に沿った授業内容・方法を実施

大学審議会「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について(答申)平成12年11月22日」には次の記載がある⁽⁴⁾。

「(4)教員の教育能力の向上及び教育の質的向上を図るための評価・認定、(教員の教育能力や実践的能力の重視)」では「教員の教育能力の向上のためには、各大学において、昨年度新たに制度化されたファカルティ・ディベロップメント(大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研究及び研修)の実施を推進する必要がある。また、教育課程の編成、実施、個々の教員の授業運営、成績評価等教育活動における一連の過程に関して、教員が、随時、意見や情報を交換し、それらの改善を検討する場を設けることも、教員の教育者としての意識を高めると同時に教育の質の向上を図る上で大きな効果があると考えられる。」

先の～の項目との重複を除くと、次の1点が挙げられる。

成績評価等教育活動における情報交換と改善

これら11項目の内容は「新任教員の教育」、「教授技術」、「教育目標・内容編成」、「評価・改善」の3つに集約できる。これらを表でまとめると表1のようになる。これらは教育のプロセスをPDC

のサイクルにあわせて指摘しているといえよう。

表1 大学審議会の指摘した項目

分類項目	内容項目
教育目標・内容編成	<ul style="list-style-type: none"> 大学等の理念・目標や教育内容・方法の組織的な研究 研修、教育目標の明確化 目標実現のためのカリキュラム編成
教授技術	<ul style="list-style-type: none"> 教授能力の向上 学生の学習意欲を喚起する授業 教授法マニュアルの作成 教材の開発 趣旨に沿った授業内容・方法
評価・改善	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動における情報交換と改善 授業評価の導入
新任教員教育	<ul style="list-style-type: none"> 新任教員オリエンテーション

3-2.大学評価機構による内容項目

「大学評価機関の創設について(報告)」⁽⁵⁾に示されている評価項目はどのように設定されているだろうか。関連する本文を手がかりにリストしてみたい。評価事業として全学テーマ別評価、分野別教育評価、分野別研究評価等を挙げているが、この中にいくつか示されている。特に先の大学審議会の内容項目に関連した内容を列記すると次のようになる。

「全学テーマ別評価」は、個別の学部等の課題ではなく、大学等としての全学的な課題に関するテーマとして、毎年度、数テーマを適切に設定し評価を行う。この中に示されている「テーマ例」としては次のような内容がリストされている。「教養教育や基礎学力の形成についての全学的な取組」については「教養教育の工夫・改善状況・基礎学力の形成のための工夫・改善状況」がある。また、「教育機能の強化のための全学的な取組」には「シラバスの作成・活用状況・厳格かつ適正な成績評価・学生による授業評価等の活用状況・学生の学習状況・ファカルティ・ディベロップメント・教員の教育活動評価の状況」が示されていた。

「分野別教育評価」においては「教育目的・目標」では「教育目的・目標の明確性、具体性(二

ーズへの対応、人材養成、学問的方向性、学部と研究科の関係付けなど) 教育目的・目標の適切な公表・周知」がある。また、「教育内容・方法」では「教育課程の編成、目的・目標に沿った体系的な教育課程の編成、(教養科目、専門基礎

科目、専門科目の関係や学生のニーズの反映、学問的動向など) 教育、学習(研究)指導の方法、体制・授業形態、学習(研究)指導方法、学習(研究)指導体制など、成績評価の方法・基準」がある。

表2 「全学テーマ別評価」と「分野別教育評価」に示された項目

評価事業	分類項目	内容項目
[全学テーマ別評価]	教養教育や基礎学力の形成についての全学的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教養教育の工夫・改善状況 ・ 基礎学力の形成のための工夫・改善状況
[分野別教育評価]	教育目的・目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育目的・目標の明確性、具体性(ニーズへの対応、人材養成、学問的方向性、学部と研究科の関係付けなど) ・ 教育目的・目標の適切な公表・周知
	教育内容・方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育課程の編成 ・ 目的・目標に沿った体系的な教育課程の編成(教養科目、専門基礎科目、専門科目の関係や学生のニーズの反映、学問的動向など) ・ 教育、学習(研究)指導の方法 ・ 体制・授業形態 ・ 学習(研究)指導方法、学習(研究)指導体制 ・ 成績評価の方法・基準
	教育の質の向上、改善のためのシステム	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育の向上、改善のための体制、システムの整備 ・ 教育実施状況や問題点の把握システム(自己評価、学生評価、外部評価、教員の教育活動評価など) ・ 組織的な教育方法等の研究・研修システム(ファカルティ・ディベロップメントなど) ・ 教員人事システム、向上、改善のための体制、システムの効果
	教育成果、目標の達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的・目標に沿った学生確保 ・ 学生の到達度、専門の学芸、幅広い教養及び総合的な判断力など ・ 単位修得、進級、卒業、資格取得など、進路(就職、進学)

「教育成果、目標の達成状況」では「目的・目標に沿った学生確保、学生の到達度、専門の学芸、幅広い教養及び総合的な判断力など、単位修得、進級、卒業、資格取得など、進路(就職、進学)」が挙げられている。「教育の質の向上、改善のためのシステム(目標設定 実施 点検・評価 改善の仕組)」では「向上、改善のための体制、システムの整備、教育実施状況や問題点の把握システム(自己評価、学生評価、外部評価、教員の教育活動評価など)、組織的な教育方法等の研究・研修システム(ファカルティ・ディベロップ

メントなど)、教員人事システム、向上、改善のための体制、システムの効果」が示されている。

表2はこれらの内容を表に整理したものである。表1で挙げられた項目との対象で見ると、「教育目標・内容編成」にあたるものは表2では「教育目的・目標」と「教育内容・方法」に該当する。「教授技術」に関する内容は「教育内容・方法」に該当する。「評価・改善」に相当するものは「教育の質の向上、改善のためのシステム」になると言える。「新任教員教育」は「教育の質の向上、改善のためのシステム」の中に位置付くと言える。

表3 平成13年報告書の全学テーマ別評価の「教養教育」に示された項目

分類	内容項目
実施体制	教養教育の実施組織, 目的及び目標の周知・公表, 教養教育の改善のための取組
教育課程の編成	教育課程の編成, 授業科目の内容
教育方法	授業形態及び学習指導法等に関する取組, 学習環境(施設・設備等)に関する取組, 成績評価法に関する取組
教育の効果	履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果, 専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果

このように見ると、大学評価機構の行う大学評価は今回のこの資料に見る限り、大学審議会の掲げた内容を精細に具体的に書き上げたものと考えることができよう。また、全学テーマ別評価で示されていた「教養教育や基礎学力の形成についての全学的な取組」に記載されていた「教養教育の工夫・改善状況・基礎学力の形成のための工夫・改善状況」という内容は今回の報告書の中では表3のように示されている。

われわれは大学教員の業務分析から、学生指導にかかわる内容を次の11項目で整理した⁽⁶⁾。

- 研究指導・授業担当
- 学生の理解・把握と学生管理
- 講義計画を立てる・教育プログラム作成
- 教材研究
- 教材作成・教材管理
- 教育機器の管理・設備の管理
- 指導方法の工夫
- 成績評価・成績管理
- 学生相談・就職指導
- ニーズ把握と教育の企画
- カリキュラム編成・カリキュラム管理

これらの分類は業務分析という視点からの検討であり、必ずしもFDとはかわりがないが、大学審議会および大学評価機構の項目とほぼ類似の内容になっている。

4. 授業や教員に対する学生たちの意見・意向

4-1. 講義や評価の仕方などに対する意見

薬学部学生FDワークショップを開催して、教員に対するFDの方向づけを得ようとした⁽⁷⁾。実施は2003年1月に4時間程度のワークショップを行った。実施対象は薬学部学生3年生53名である。1グループ5名でカードワークを行った。ひとり10枚程度、薬学部教育に関して自由に意見を記述し、これを分類して改善のための提案をまとめた。ここではその中から3グループの成果から代表的な意見を抽出して記載した。「記述例」はそれらを示している。この記述例の文章は原文を簡潔に記載しており、原文とは異なる。

(1) 講義時間

学生達の講義時間に対する意見の数は多い。その大半は時刻、時間を守らないことに集中している。基本的には学生達の限られた時間を有効に厳格に扱って欲しいという意向を反映していると考えられる。一般に、学生の生活時間は教員が考える以上に多忙である。

[記述例: ・授業時間が長い。・休憩が欲しい。・時間に遅れてきて延長する。・遅刻しすぎ。・授業終了時刻が毎回20分オーバー。・講義の終了時間を守らない。]

(2) 試験・成績評価

この内容については公平性と試験頻度、試験内容の妥当性、内容の難易度、評価の姿勢が挙げられている。当然のことだが、不公平な扱いや、むやみに小テストを繰り返したり、試験範囲が広す

ぎたりすることも不評である。試験問題作成の原則から外れた作成方法もこのような記述から類推できる。

[記述例: ・公平に、納得のいく試験をしてほしい。・テストが難しすぎる。・試験問題における過去問の重要性が高すぎる。・自分の研究内容を試験に出す。・テスト範囲が広すぎて何が重要かわからない。・記述問題の採点基準。・カンニング黙認。・再試に試験範囲外の内容。・暗記だけのテスト。・講義でやってないことを試験に出す。・テストの穴埋め問題で()の数が多すぎて文章の意味がわからず解けない。・テスト用紙の解答欄を狭くするのはやめて。・テスト結果を張り出すのをやめて欲しい。・成績のつけ方がよく変わる。]

(3) 教員の態度

学生たちは、なにげない日常の中から大学教員の姿を見ている。多い意見は、自己満足、自己宣伝、自慢、自分勝手というような批判である。相手の立場に立って考えることを求めている。

[記述例: ・指名するのが不公平。・ひとりの世界に入っている、人間味がない。・教授間の連絡が取れていない。・教授に危機感がない。・自分の分野を押し付ける。・質問の意味がわからない。・答えたことにキレないで欲しい。・自分の趣味に走った授業をする。・教室の空気が読めない。・自慢話ばかりする。・ちょっと怖い。・自信満々。・無駄話が多い。・講義は学生に教えるという認識をもっていない。]

(4) 授業の仕方

学生たちはその時間内でわかる授業を求める。また、分かりやすい授業が前提という考え方も見出せる。そのための最低限の授業の品質を求めている。たとえば声が聞こえない、黒板の文字が判読できないのでは授業に来ても何しに来たのかと考えるだろう。また、教科書を使うのであれば、その関係を明確に示しながら展開することが必要だろう。わかりやすくしてほしいという背景には講義の準備をして、ポイントを明確にし、理解しやすいように講義の組み立てを論理的にすることが含まれている。

[記述例: ・ついていけない。・わからない。・黒板に向けたまま話している。・教科書のページ数飛びすぎ。・授業に熱すぎる。・ついていけな

い。・話す内容がまとまっていない。・教科書を読んでいるだけ。・板書を間違えないで。・話が難しすぎてわからない。・テキストがわかりにくい。・どこを説明しているかわからない。・何が重要かわからない。・教科書の棒読み。・自分の授業を「完璧だ!」と思い込む。・先生によって講義内容の濃度の差がありすぎる。・教科書の内容をやらずに更に難しいことを講義する。・どこが大事なのかわからない。・講義の後に復習しやすいようにして。・無駄なプリントが多すぎる。・声が小さい。・マイクを使っても声が聞こえない。・話すのが早すぎる。・何を言っているのかわからない。・黒板の字が読めないくらい汚い。・間違ったことを黒板に書く。・ノートを取りにくい。・字が見えない。・字が読めない。・一人で授業する先生。・ボソボソ言っている。・板書下手すぎ。・板書の量が多く、写し取るのに精一杯で講義中に理解できない。・話し方が嫌。・ただひたすら教科書を読んでいくという感じ。・分かりやすいけど、後から考えると分からない。・プリントを配布するなら教科書はいらない。・教科書を買わせるのに使わない。]

(5) レポートと小テスト

レポートを書くのがいやなのではなく、無意味と思わせるような課題が多いと記述している。提出したらそのレスポンスも求めている。小テストも同様の配慮がないと同様の認識になるだろう。

[記述例: ・レポートが多すぎる。・講義が適当なのに毎週課題を出されても困る。・覚えることが多すぎる。・意味が無く量だけ多い、小テストは無駄。・テストの答案を返して欲しい。・レポートの返事が欲しい。・意味なくレポート出さないうで欲しい。・出せばいいみたいなレポートなら出す意味がない。・提出の有無をチェックしない。・レポートを提出させればよいと思っている。・何を書けばいいかわからない。・レポート毎週はきつい。]

(6) カリキュラム

カリキュラムに対する意見のうち多いものは講義数が多いこと、実習実験に時間がかかること、学部の教育目標が実態に合っていないことなどが挙げられていた。学生たちの進路や目的にあったカリキュラム編成にすると同時に、カリキュラ

ムや講義の趣旨について説明しなければならないようだ。

[記述例: ・カリキュラムを、職業人育成に重点をおくのか、研究者育成に重点をおくのかはつきりすべき。・講義があるのに実験が長すぎる。・専門が1日4コマもあるのは多すぎる。・各講義の統一性がとれていない。・講義数が多すぎる。・他の学部比べて、専門科目が多いのに一般教養も多い。・講義の数が多い。]

4-2. 良い授業と悪い授業に関する記述

「良い授業と悪い授業」について1人が複数を自由記述してもらう方法でアンケートを実施した⁽⁸⁾。実施対象は教職科目「教育方法学」の受講学生96名である。所属と学年は総合科学部学生3年生と4年生、実施は2003年4月の第1回講義の始まる前に記入して提出させたものである。予見を与えずに率直な意向を確認するためである。また、講義の最終日に自分たちで制作する授業の方向性を作り上げる効果もねらいとしている。収集した記述件数は「良い授業」が365件、「悪い授業」が357件であった。2002年4月にも同様の対象と方法で63名収集している。学生たちはこれまでに経験してきた大学・高校の授業を振り返りながら記述している。注に任意に各100件ほどの記述を抽出して原文のまま記載した。これらを検討すると以下のことがわかる。

第1に学生の求める授業は「学生中心の授業」を期待していることである。学生たちの興味・関心にあわせて行うことがポイントといえよう。第2に授業や学生指導に熱心であることである。熱意をもって授業に臨んでいることが大事である。第3に、このための基礎として学生を理解していることが求められる。学生たちの日常生活や現在当面している状況、将来の生活などのこと、さらに学生たちの話題や考え方の特徴などを理解した上で行う必要があるといえよう。第4は教授技術や教え方のスキル、マナーである。「話すのが上手で、板書がきれいで、ビデオやOHPを使い、適切な資料やテキストを配布する」ことは必須の要件といえる。

第5にわかりやすい授業への工夫、努力である。

わかりやすい授業は簡単にはできないが、「どのようにすれば学生が理解しやすくなるか」を意識化して作業していくことである。この成否は授業準備もそうであるが、なによりも授業内容に対する研究がきちんとできているかにある。その分野の研究者であっても自分の対象とする学生に合わせて、教材研究(教える内容について教える立場から研究すること)は学術研究と同様に大事な作業である。第6に授業実施の方法は一方通行でない交流のあるものをイメージしていることである。この点は従来の「講義」のイメージとは根本的に異なる。具体的には双方向の交流があり、学生が参加できる授業である。学生たちが発言でき、あるいはワークショップなど学生同士で作業しながら考えたり、まとめたりする授業が求められている。

これらの内容を総括的に言うと、学生たちが求めるものは短期的に個々の教員が取り組むことで解決もしくは改善できることがかなりの部分を構成していることである。また、長期的な取り組みは大学全体を含めて実施していかなければならないことも多い。たとえ、短期的と見られているものでも、たとえばモラルや態度などは意識改革を前提にしなければ進めることができないものも含まれている。このように考えてみると、教授技術のスキルが短期的取り組みと長期的取り組みの接点にあり、両者に良好な結果をもたらすと推測できる。FDのテーマの取り上げ方はさまざまな考え方があり得るが、学生に還元し、教員の姿を確立するにはこの分野を先行させることは優れた成果に近づくと考えられる。短期的な取り組みを行い、その結果を得つつ長期的な取り組みの基礎を築き上げることが戦略的に意義があると考えたい。

5. 実践的・体系的FD活動の方向

これまでに検討してきた内容を土台にしながらあるべきFD活動の方向を検討したい。今日、大学教育が社会から問われていることの実態があり、一方で大学教育に対する学生たちからの多くの批判や意見がある。しかし、大学教員が成すべきことは外から見ているほど少なくはないこ

とも事実である。古き時代の大学教員の姿とはかけ離れた姿がそこにはある。研究に没頭し、研究成果を学生に話し、話した内容が著書になるというサイクルは今日、困難となっている。講義は淡々と話すだけで通用した時代は去り、いかに学生が理解できるようにするかが基軸に考えなければならない時代になった。これは大学の本来の機能と時代背景をもとにして至った帰結と認識すべきだろう。

5-1. FD の実像 - 大学教育の現実 -

大学教育で何を重点に置くべきかという論議でよくあるものは「教育と研究」のどちらを優先するかということである。これは業績評価の考え方、評価の実施と相まって揺れる現実がある。しかし、大学にとっての主たるユーザーは学生であり、社会人である。また、教育が充実すれば研究も充実するという特性を活用したシステムを設定することが大事になる。

大学教員の採用は最近になって教育の力量を考慮するようになってきてはいるが、それもプレゼンテーション能力だけであることが多く、学生の求める教育像の一部分に過ぎない。いわば教育の進め方についての学習がないまま教育にあたることになる。大学のシステムから教育内容が時代の変化に対する対応力をなくし、その対応が遅れがちになることは、現在の教員採用システムや業務の遂行体制ではやむをえない点が多い。このようなシステムを改善することも FD に課されたテーマであろう。

大学教育のカリキュラム編成の基本的な作成手続きを見てみるとカリキュラム変更の柔軟さに乏しいことが見出せる。大学は教員を採用するとその時期のニーズを反映したものになる。しかし、この人を前提に何年もの間、カリキュラム編成に影響を及ぼすことになる。人材を前提にカリキュラムをつくることは基本的な作成手続きにはない。手続きに従えば、まずは卒業時の学生の人物像を描き、これには何が必要かで書き上げ、これを効果的に教育する教員は誰かという流れになる。今日、大学教員の公募制度や任期制などはこれらの困難を改善する取り組みとして環境は

改善しつつあるとあってよい。カリキュラムが実施されたとしても、まだ課題は多い。大学教育は学年進行ごとに評価するが、それは科目ごとの分業化された評価であって、学生がどこまで到達したかを評価しているものではない。科目になった時点から分業となり、それらの相互を関係付けるものは少ないのである。これらの指摘はほんの一部に過ぎないが、このような現実を承知した上で FD を組織していくことが生産的な視点であろう。

5-2. 実践的・体系的 FD 活動

(1) 実践的 FD 活動へのシフト

ここで提起する方向は実践的・体系的 FD 活動という言葉でまとめられる。今、個々の教員の活動に直接的な影響を与えるものは実践的な FD 活動である。日常的に実践し、ひとつひとつ成果を挙げようような実践力を伴ったものが必要といえよう。また、FD 活動を単発の内容で羅列している方式では短い時間で多くの成果を挙げることは難しい。FD 活動の個々のプログラムが相互に働きあい、個々のプログラムの目標以上の成果をもたらすように編成すべきであろう。このためには体系的性が備わっている必要がある。これを体系的 FD 活動と呼ぶことにする。この両者を合わせて、「実践的・体系的 FD 活動」という名称で扱うことにしたい。

従来の FD 活動のよくあるパターンについてみよう。インターネットで大学の FD に関する頁を検索すると、非常に多くのサイトが見つかる。これらの内容を整理してみると次のような内容であることがわかる。

FD に関する講演会を開催する。

FD シンポジウムで実践例を聞く。

話し方や授業の仕方について、専門家からテクニカルな内容を聞く。

ワークショップを開催する。

授業公開をする。授業研究会を開催する。実施報告書をまとめて、配布資料を掲載する。

これらは実践的とはいいいがたいように思う。発想を変えて、同じ内容を実践的に改善すると次のように示せる。

FD に関する講演会を鼎談にする。大学での問題、課題を講師と共に解決策を考える。FD シンポジウムで実践例を聞き、シンポジストに個別に相談し、解説してもらう。話し方や授業の仕方について専門家からテクニカルな内容を聞き、個別にトレーニングを受ける。

実施報告書を文書と映像記録でまとめて、関心のある方が後日、学習できるようにする。

授業研究会を開催し、内容に立ち入って検討する。

実践的とは個々の教員が自ら体験し、実行可能な実践を進めることができることを意味しているといつてよい。従って、この考え方でFD活動のひとつひとつを考えれば既存の内容も再構成できる。この発想や考え方を適用すればどのような蓄積も生かすことができる。

(2)体系的FD活動の構築

実践的FDとは異なり、体系的FD活動は始めから意図して関連付け、段階付けをしておかなければならないことである。体系的FD活動の構築は次のような効果が期待できる。

段階的なFDの取り組みが提供できる

プログラムの相互関連による効果が大きい

教員の教育に関する力量の向上のプロセスが明確にできる

FD活動の内容・方法の全体像が見える

大学の教育力の評価ができる

計画的FDが展開できる

企業内教育では経営目標を実現する一環として教育体系が設定されている。大学経営に置き換えてみれば、大学教員に対しても同様に設定することは可能であり、効果も期待できるといえよう。

体系的FDの構築にあたっては次のようなねらいを設定するとよい。

全学部学科の授業の質的向上、学生からの満足度の向上、その他教育に関する力量を向上する

継続的FDの実施を可能にする

学部FD活動と重複せず、これを支援する体系によって補完的關係を持たせる

教授技術を中心にした内容から全学的課題、(例えば大学理念の検討やカリキュラム編成、教員の教育力の評価体制)までを扱う

少なくとも、現状のFDの問題点を整理し、大学の経営課題を明確にした上でこれらの作業を開始したほうがより妥当な体系化が進められるだろう。

(3)体系的FDモデル

ここではモデル的に1つの大学の体系的FDモデルを示す。図1はこれを表している。FDを3つの軸で表した。第1軸はFD内容項目である。第2軸は学部もしくは専門内容である。第3軸はFD実施レベルとした。第1軸は教授技術スキル系、目標・カリキュラム系、教育評価系とした。第2軸はそれぞれの大学の有する学部、部局などごとに設定する。第3軸のFD実施レベルは入門レベル、基本習得レベル、応用・発展レベル、創作・発展レベル、支援・指導レベルとした。このキュービクの中で関連するFDを実施することでFD活動全体が有機的に結び合うことを意図している。

図2は第1軸と第3軸の体系を示している。第2軸は学部もしくは専門内容の系である。したがって、例えば工学部であれば工学部の内容を対象として扱うFDのみを表示している。教授技術スキル系、目標・カリキュラム系、教育評価系の内容項目ごとにFD実施レベルを入門レベル、基本習得レベル、応用・発展レベル、創作・発展レベル、支援・指導レベルの5段階で横に実施していくように意図している。レベルごとでも縦に関連付けて見ることが可能である。同様にして図3はFD実施レベルのみについて見たものである。FD体系モデルは具体的なプログラムに記述することで完成する。各大学の実情に応じてこのモデルを適用し、意義のある実用的なFD体系に仕上げることができるだろう。

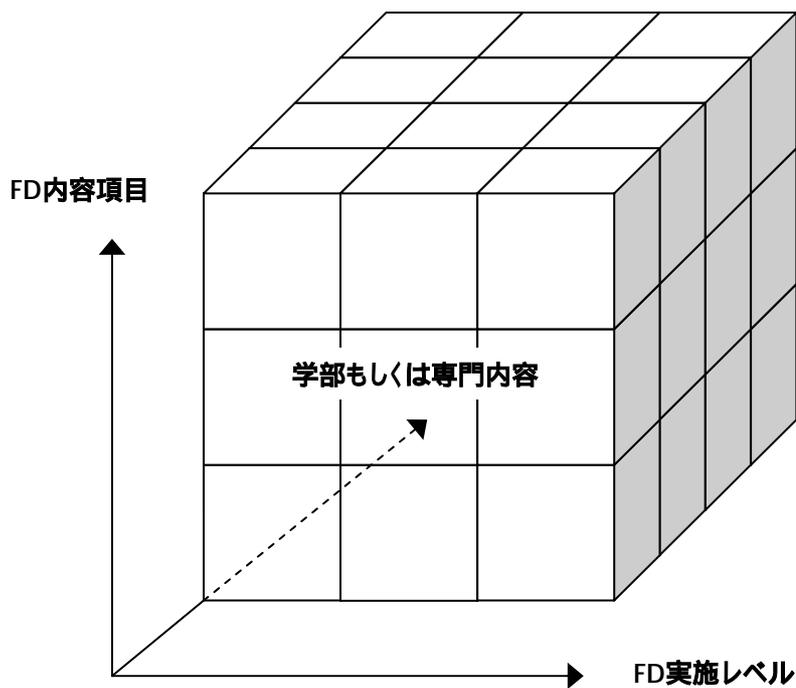


図1 体系的FDモデル

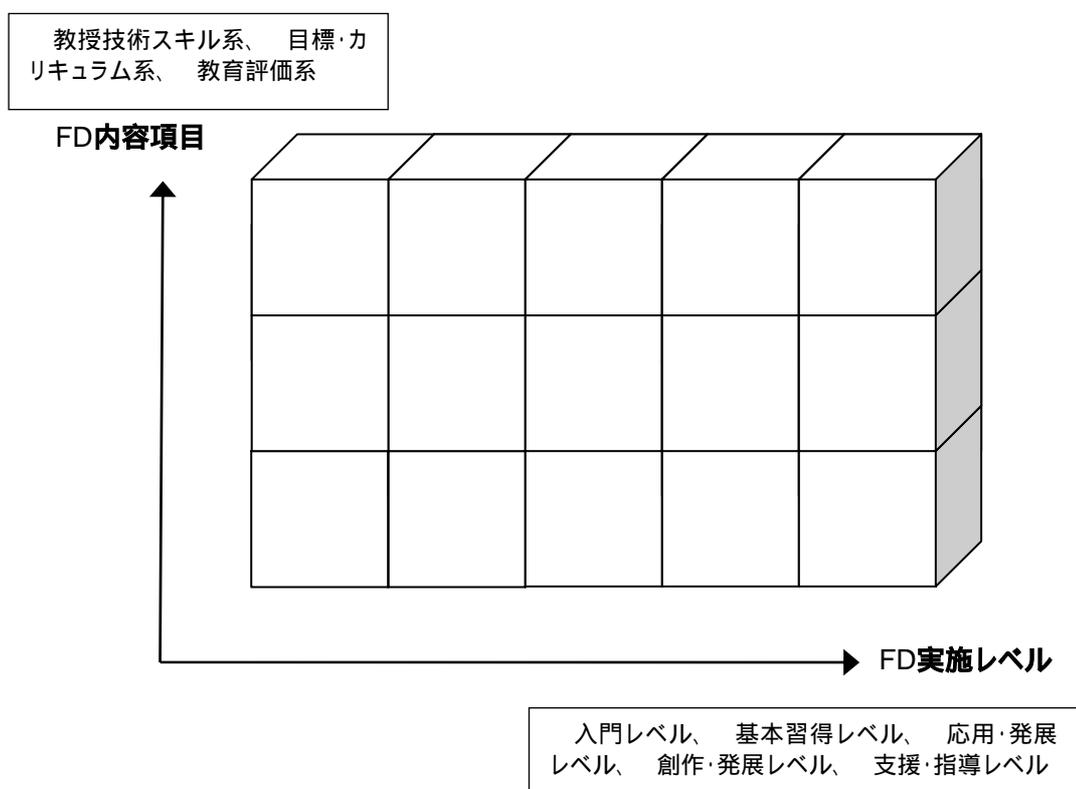


図2 学部ごとのFD内容項目とFD実施レベルの体系

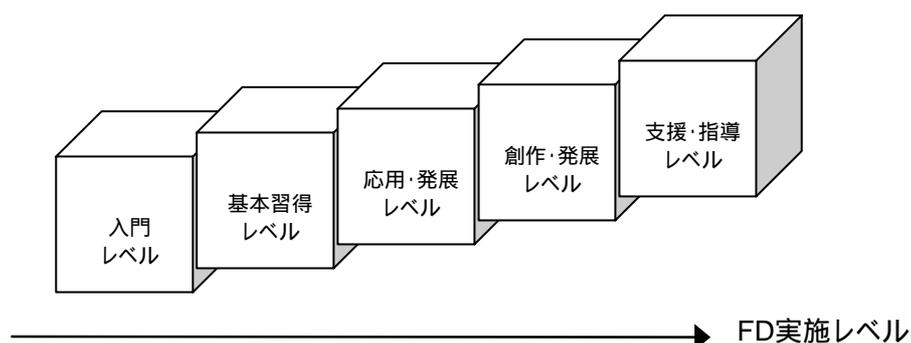


図3 FD内容項目ごとのFD実施レベルの体系

5-3.実践的・体系的FD活動の実施と課題

徳島大学の「全学FD推進プログラム」は実践的・体系的FD活動の典型として紹介することができる⁽⁹⁾。2001年度に実践的・体系的FD活動を提案した。この翌年度である2002年度、そして2003年度と2年の実施を体験した。この報告については他の論稿にあるので、ここではこのプログラムによって何を果たし、何が課題としてあるかを検討することにしたい。

(1)徳島大学における実践的・体系的FD活動で得たもの

この実施によって得られたものの第1はFDという見えづらい内容をこのプログラムによって確実に進歩していることがわかり、確かな成果に結びついていることが確認できる。このことはとりもなおさず、評価が明確になることでもある。講演のようなイベントにおいては見られなかった交流がある。製作物よりも製作の過程で明らかになり、互いの教育の考えや方法が理解されることが大きな利点であろう。第2に結果が見える取り組みへの意欲が高まってきたことである。したがって、その場限りでなく継続的な取り組みへの動因ともなりうると思われる。第3に教員同士で互いに研鑽し、研究業績として発展できるように努力するなどが見られるようになったことである。教員仲間で互いに研鑽し、FD活動が業績に結びつく取り組みへと発展している。第4にFD活動に参加した教員たちが自信をもって授業の

改善を行う姿が報告されるようになって来たことが挙げられる。

(2)実践的・体系的FD活動の課題

課題として残されたものも少なくない。しかし、これらは実践的・体系的FD活動の成果に損害を及ぼすには至ってはいないと認識している。課題のいくつかを列記すると、次のようになる。

第1は大学管理者から運営に当たる職員のひとりひとりまでが責任と自覚を持ってあたなければならないという認識を維持することの困難さである。このことがいつでも討議され解消されるように方向づけることが大切になる。第2にFD活動は一定の品質を維持しようとするれば明確な予算化が基盤にないとできないことである。まず、実施してみたら考えるということであると基盤は揺らぐこととなる。このことの認識が一致していなければならない。第3は大学の中の世論づくりである。FD活動を進めるという運動が日常的に目に見えていないといつでも、元の何もしない状態に戻る力が働いているのである。第4にFD活動推進の主体者の取り組み姿勢、課題意識、研鑽が求められている。第5にFD活動は放置すれば枯渇し、風化するという事実があるので気を付けなければならない。これらはいずれも実践的・体系的で成果に結びつく活動であればこそ逆に大きなダメージとして降りかかることになるのである。

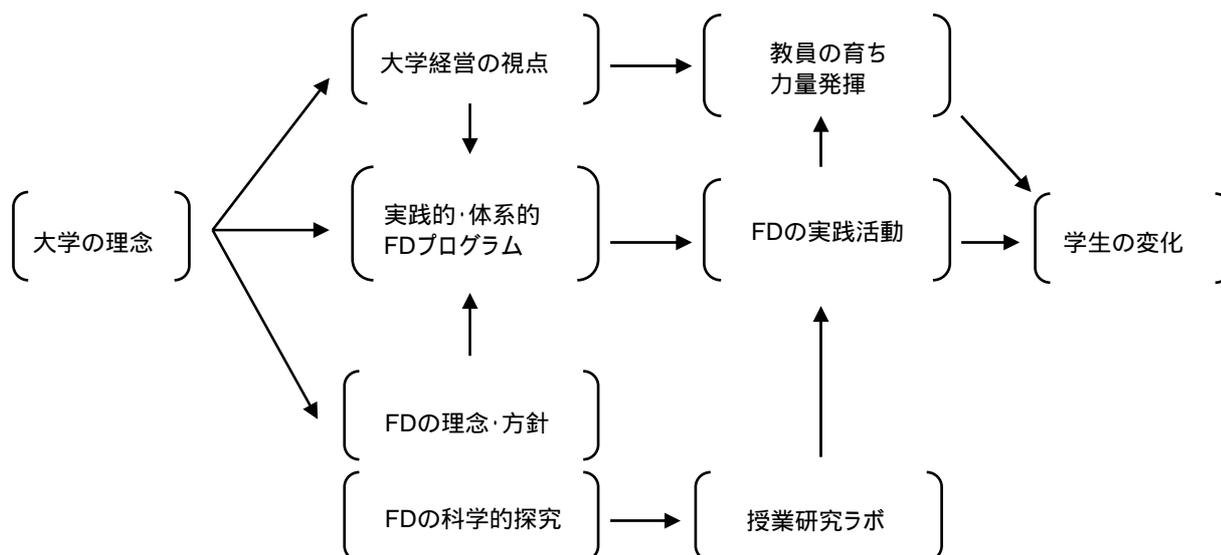


図4 実践的・体系的FDを支える環境

6. 実践的・体系的FD活動を支える力

本論で提起した実践的・体系的FD活動を継続し、発展させるためにはどのような環境や条件があればよいだろうか。これまでの活動範囲から見て大学という機関を挙げての取り組み姿勢が求められることは想像できる。また、FDを担当する部門は孤立せず、全体の中で適切に位置づけ、その機能を発揮させなければならない。大学管理者とFD担当部門が多くの連携で実施しなければならないことはいうまでもない。これらのことを図式によって明確にしたい。

図4はFD活動を支える環境を示している。大学理念が大学の経営の視点を生み出し、実践的・体系的FDプログラムに影響を与える。もしも画一的なFD活動であればこのような位置にはならないだろう。もっと軽微な扱いとなる。他方、FDにはその根本を形成する理念、考え方があり、これは大学理念と反するものではない。この理念やプログラムは科学的探究のもとに作り上げられる。この活動が授業研究ラボのような研究設備、実験設備を用いて検証されることとなる。このような中でFDの実践活動が展開され、結果は教員

の育ちとなって現れる。これは教員の持つ力量の発揮でもある。充実した発揮はやがて学生たちの変化となって現れる。このような変化は社会の認識にまで変化を与えるであろう。したがって、FDの担当部門は単なる企画者兼実務者ではない。この環境すべてに関わる部門といえる。とりわけ、研究と検証というサイクルを加えることでこれらは機能する。FD事業の予算化はもとより、FDの人材ネットワークや設備面の充実も欠かすことはできない。

これまでに重要性が指摘されながら、この部分が脆弱になっているのは学生の教育に直接的に関わらないこと、つまり間接的な関与の位置にあることが原因としてある。一方でイベント主義的なFDで実績とする風潮がこの種の考え方を後退させていたと言えるのではないだろうか。われわれは大学教育を充実させ、大学が地域からも社会からも評価される位置にあり続けるためにはこの図式を認識することからはじめなければならない。

注

- (1) 森 和夫「大学教員に求められる職業能力と能力開発プログラム構築の試案 - FD活動の

機能と能力開発のかかわりの検討を中心に
-」徳島大学大学開放実践センター紀要, 第
13巻, pp.30-43, 2001.

- (2) 大学審議会「高等教育の一層の改善について
(答申)大学審議会 平成9年12月18日」
「3.一層の改善のための方策」に記載
文部科学省審議会情報ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/index.htm の中の大学
審議会関係の資料からこの関係の資料を
引用した。
- (3) 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方
策について—競争的環境の中で個性が輝く大
学(答申)平成10年10月26日」の「第1
章 21世紀初頭の社会状況と大学像、2 高等
教育改革進展の現状と課題、ii」現状の問題点
と課題、(ア)現状の問題点」に記載
- (4) 大学審議会「グローバル化時代に求められる
高等教育の在り方について(答申)平成12
年11月22日」に記載
- (5) 大学評価・学位授与機構「大学評価機関の創
設について(報告)」平成12年2月に記載
大学評価・学位授与機構ホームページ
<http://www.niad.ac.jp/index.html> の
中の関係資料から引用した。
- (6) 森 和夫「大学教員に求められる職業能力と
能力開発プログラム構築の試案 - FD 活動の
機能と能力開発のかかわりの検討を中心に
-」同掲書
- (7) 徳島大学歯学部「歯学部 FD 学生ワークショ
ップ報告書」2003.1
- (8) 森 和夫「総合科学部学生アンケート結果速
報」2003.4 より引用

「良い授業」について

[記述例: (001)先生が全体を見渡している,
(002)先生が楽しんでいる,(003)学生のことを正
しく解している,(004)反応を見ながら授業してい
る,(005)想像力をかきたてる,(006)大事である
所を強調する授業,(007)授業の合間に学生の興味
を引くようにギャグを言う,(008)言う、書く等の
作業に偏りが無い授業,(009)説明がきちんと聞こ
える,(010)スライド、OHP などの使用が的確、

(011)発言の機会がある,(012)黒板に書いた字が
わかりやすい,(013)教員と学生の間で質問・返答
がある,(014)わかりやすい,(015)字がきれい、
見やすい,(016)教員が面白い話をしてくれる、
(017)話が面白い,(018)テンポがいい,(019)理
解しやすい,(020)ポイントがわかりやすい,(021)
ワークショップ形式で自分たちがいろいろ体験
していく形式,(022)教室内を見て回って到達度
を確認していく,(023)OHPの使い方が上手,(024)
あまり自分を出しすぎない,(025)学生に発言を求
める,(026)ある程度の授業のプランがある,(027)
レジュメ、資料が適切に配られる,(028)学生にも
時々質問する,(029)わかりやすい説明,(030)学
生参加型の授業,(調べたものを発表し意見交換な
ど),(031)教員の話が興味深く、面白い授業,(032)
ビデオなどを使う,(033)配布されるレジュメがわ
かりやすくまとまっている,(034)声が聞き取りや
すいなど話すのが上手,(035)板書をうまく利用す
る,(036)ポイントを強調する,(037)学生に合わ
せた授業,(038)到達目標を持った授業,(039)教
員がやる気のある授業,(040)学生のやる気を出さ
せる授業,(041)話が面白い,(042)聞き取りやす
い授業,(043)親しみやすい、学生主体の授業、
(044)一辺倒でない、興味のもてるような独特の
授業,(045)先生の熱心さが感じられる授業,(046)
効率の良い授業,(047)学生によく当ててしゃべら
せる,(048)学生が理解できるまで待つ,(049)で
きるだけ面白い、わかりやすい授業を心がける、
(教えることだけしかやらない教師がいるから)、
(050)コミュニケーションをとりながら,(051)
みんなが納得する,(わかる)授業,(052)学生に質
問や発言を促す,(053)具体例をだしながら講義を
進める,(054)理解を確認するための課題が出る、
(055)テーマがはっきりしている,(056)教員の熱
意が伝わってくる,(057)発表が盛ん,(058)学生
に意見を聞く,(059)シラバスにそっている,(060)
得るものが多い,(061)先生がはっきり話す,(062)
教員が始めからはっきりとした目的を持っている
授業,(063)黒板の字が丁寧で見やすい,(064)
会話が上手く、授業意図に話がつながる,(065)
身近な例を挙げてわかりやすく説明する,(066)
学生に選択権を与える,(10回の講義のうち3回
分をレポートにして提出させるなど),(067)声が大
きい、聞き取りやすい,(068)少人数学生を巻き

込める、(069)意味がわかる、(070)理論についての具体例が多い、(071)理解しにくい事柄をわかりやすい例を出して説明してくれる、(072)板書が見やすい、(字がきれい)、(073)声大きい、(074)定刻に始まり、定刻に終わる、(075)レポートの企画段階からコメントをくれ、1人1人チェックし返却する、(076)学外に関わりを持ち、積極的に活動を行う、(077)学生に質問等をして理解度を高める、(078)ノートに取りやすい黒板の書き方、話の仕方、(079)学生にとって興味を持てる話題を取り込む、(080)OHP やパソコンなどの画像を利用する、(081)学生の様子を見ながら進め、理解していきなそうだったらもう1度説明してくれる、(082)はっきりとした口調で話をしてくれる、(083)整理しながら黒板に書いてくれる、(084)時間を守る、(085)演習を授業中に取り入れてくれる、(086)学生の様子を確認しながら進める授業、(087)ときには授業とは違う話をして教室を明るくする、(088)勉強を楽しく教える授業、(089)学生に理解できているか確かめてくれる、(090)要点をまとめてくれる、(091)たくさん例を出してくれる、(092)学生に発言を促し、困ったときには明確なアドバイスが得られる、(093)解説と板書のテンポがよく、ノートをとっていてもちゃんと話しが聞ける、(094)身近なものをネタにして親近感を誘う、(095)学生のこと(やる気のある学生に対して)を考えてくれる授業、(096)理解を考えて作っている授業、(097)目的意識、終わってからの達成感のある授業、(098)あとに残る授業、(099)可能性を引き出す授業、(100)教授がわかりやすい授業をする

「悪い授業」について

[記述例: (001)ひたすら説明を聞くだけ...、(002)聞き取りにくいくらい声が小さい先生の授業、(003)段取りや時間配分が悪い、(004)板書が見づらい、(005)一方的な授業、(006)自分のペースでどんどん進める教師の授業、(007)自分の世界に浸っている教師の授業、(008)黒板や機械をあまり使わない授業、(009)教師の話し方に抑揚がない授業、(010)学生の意見が反映されない授業、(011)授業中に部屋を出て、自分の用事をする教授がいた、(012)時間にルーズである、(013)事前の準備が不十分である、(014)学生の理解度や反応を無視している、(015)学生の私語を注意できない、(016)

シラバスの予定が大幅に遅れてしまう、(017)一方的に教授が前で話している授業、(018)学生の理解度を確認せずに、進めていく授業、(019)ただ黒板に板書していただくだけの授業、(020)配布物が必要以上に多い、(021)遅刻してきて遅く終了する授業、(022)一方的に話すだけ、(023)一方的に、単調的に壇上でのみ話しを展開する、(024)「教える」ということを前提にせず、自分の興味のある研究対象を語ることに終始している、(025)レジュメに参考資料を配って、それを読むだけのもの、(026)学生をみていない、一人よがりの授業、(027)単位を出し忘れる先生の授業、(028)シラバスに書いてあることと違うことをする授業、(029)テキストばかりを使って1人で進める、(030)時間を延長する、遅刻してくる、(031)私語を注意しない、(032)板書の字が汚い、小さい、(033)先生の熱意が感じられない、(034)テストが多い、(035)テストで成績を決める、(036)講義で自分の話ばかりする、(037)暗記型テストをする、(038)突発的、(039)私語を注意しない、(040)遅刻を注意しない、(041)計画性がない、(042)黒板が汚くて読みにくい、(043)内容が難しすぎる、(044)学生の反応を見ない、(045)話しかけにくい、(046)意見すると機嫌が悪くなる、(047)遅刻、(048)だるそうに話す、(049)何が言いたいかわからん、(050)熱意が感じられない、(051)主観的に進めすぎる、(052)学生に対する配慮がない、(053)準備をしていない、(054)柔軟性がない、(055)教員の一方的な授業、(056)教員が授業に対する不満を授業の最終からぶつぶつ言って始まる授業、(057)寝ている学生がいても、授業改善を試みず、そのまま続ける、(058)ものすごく厳しい先生の授業、(怒鳴る、怒る、退出させる)、(059)一方的に話を聞くだけの授業、(060)プリント、資料は文字がびっしりで面白くないもの、(061)プリントの内容を上から順に話していただくだけの授業、(062)面白みや疑問など何も感じない授業、(063)学生の興味を引こうと全くせず、自分の世界に入ってしまった授業、(064)声が聞こえにくい、(065)後ろの人に見えないような文字を書く、(066)自慢話をたくさんする授業、(067)学生のことを考えてくれない授業、(068)出席や平常点なしで試験だけで成績を評価する、(069)自分の学歴や過去の経歴ばかりを前面に出す、(070)小声でぼそぼそ、自分のペースで授業を進める、

(071) 学生の授業環境を全く考えてくれない、
(072) 黒板を書くのが早く、しかも消すのも早い、
(073) 文章を長々と書いたプリントを配られ、それ
を読むだけの授業、(074) 教官の態度が大きい、
(075) 自分が書いた論文の解説のような講義、
(076) 学生の意見を聞かず、自分の意見だけで進め
られる講義、(077) 板書もせず、レジュメ、資料が
ない、理解しづらい講義、(078) 数人の教授が行う
講義で、教授同士の打ち合わせが完全でない講義、
(079) 何をしゃべっているか聞き取れない、(080)
何をやっているのかわからなくても進んでいく、
(081) 授業の空間に入っても、一瞬ついていけなく
なると、あとから追いつけず、入っていけなくな
る、(082) ただ一方的に話すだけ、(083) 授業が計
画通りに進まない、(084) ガチガチの詰め込み式、
(085) 一方的に授業を展開、(086) 自論を強調、加
熱するあまり怒りだし、学生がついてこない、
(087) 聞き取り難い小さな声で一方的に教授が話

す授業、(088) 教授の専門分野のとても狭い範囲の
みについて、学生の理解度を気にかけず進める授
業、(089) 授業題目を本当に学習したと言えるかど
うかわからないような題目に沿っていない授業、
(090) できるかぎりの努力はしたのに、それを評価
してくれなかった授業、(091) 教授が授業時間に遅
れてきたり、終了時間をオーバーしたりと時間に
ルーズな授業、(092) 何をしているのかわからない、
(093) 声が小さい、(094) 黒板の文字が小さい、
(095) 一方的な考え方を押し付ける、(096) 要点は
板書せず、気分で板書をしている。受講者全員が
試験に落ちた、(097) プリントが配られるがすべて
本の引用。読んでも意味がわからない、(098) 板書
が多すぎて、話を聞けない、(099) 自分の自慢話が
多い、(100) 教科書を読むだけ

(9) 徳島大学「平成14年度全学FD推進プログラ
ム実施報告書」2004.3